

校名：岩手大学教育学部附属小学校

所在地：〒020-0807 岩手県盛岡市加賀野2-6-1

記載日：平成28年5月20日 記載者：阿部 真一 記載者役職：副校長

貴校の校風、大まかな特色について：

本校の学校教育目標は、「未来を切り拓く人間」の育成である。校内研究においては、時代とともに求められる「未来を切り拓く人間として必要な資質や能力」を明らかにし、それを教科等の学びの中で育てる授業づくりを進めてきた。したがって、本校の教員は、教科指導に限らず、すべての教育活動において「創造的」で「研究的」である。子どもたちも、「知的で創造的な学び」を好み、自ら思考を働かせながら協働的に新たな価値を発見する学びを楽しんでいる。PTA活動も自立しており、保護者が「学校と子どもと自分たちのため」をモットーに自主的にPTA事業を行ったり、自分たちでサークルを作って活動を楽しんだりしている。総じて本校は、教師も子どももPTAも、自由な雰囲気の中で、自分をしっかりと主張し、他者とのかかわりの中で協調しながら自己実現を図ることが出来る校風である。

本校の大きな特色は、先進的な授業研究もそうであるが、「体験活動の充実」「英語学習の推進」「複式の授業モデルの構築」、そして「課外活動（合唱・吹奏楽）の活躍」がある。特に、複式の授業モデルは、岩手県に数多くある複式学級を有する学校の大きな拠り所となっている。また、合唱クラブは昨年度全国合唱コンクールで3位になるなど、全国的な成果を上げている。

貴校の卒業生の活躍状況について：

本校の卒業生は、岩手県内に限らず、全国各地で活躍している。現岩手県知事も本校の卒業生であり、政治家、会社経営者、大学教授、医者、研究者、音楽家、芸術家、スポーツ選手、アナウンサー、マスコミ関係など活躍の場は多岐にわたっている。本校には同窓会があり、数年に1度名簿を作成しているが、残念ながら近年の名簿は作成していない。

貴校勤務経験者の先生が公立学校・教育委員会などへ戻られた後の活躍状況について：

本校勤務の先生方は、その授業力や指導力、教科の専門性の高さを評価され、教育委員会の指導主事、公立学校の副校長・主幹教諭・研究主任などに転出している。教育委員会では、教科の専門家として管内の学校の授業研究や教員の指導にあたっており、公立学校では、学校運営や校内研究の要として存在感を発揮している。本校にはOB会があり、その事務局が毎年異動を確認して名簿を作成し、年に1度総会と懇親会を開いて旧交をあたためている。

魅力のある、特色のある、または、今後、公立学校へも展開できそうな先導的な取り組みなどについて：

(1) 先進的な校内研究～『創発の学び』を実現する教育課程の創造～

本校は、2年に1度（6月と12月の2回）学校公開研究会を開催し、本校の校内研究の成果を県内外の先生方に広く発信している。毎年、延べ1200名を超える参加者があり、本校の研究に対する期待を強く感じている。また、本校の研究が県内の学校の校内研究に大きな影響を与えていることについて、その責任も重く受け止めている。そのために本校は、これからの社会を生きる子どもたちに必要な資質や能力と学びを追究し、岩手県の教育の先進的な役割を果たすべく日々研究を重ねている。

ア 研究内容の先進性

- ・ 国立政策研究所研究指定による「論理的思考」の育成
- ・ 次期学習指導要領改訂の重点である「主体的・協働的な学び」（アクティブ・ラーニング）の具体化
- ・ 「学びの質の向上」を目指した教科の本質を踏まえた資質・能力の育成

イ 岩手大学との共同研究

- ・ 大学の先生と連携した実践研究の推進

ウ 岩手県教育委員会との連携

- ・ 学校公開研究会を初任者研修に位置付ける（初任者への授業モデルとして）
- ・ 公開授業の助言者を依頼する（附属小の研究実践を県内へ）

エ 学校公開研究会の開催（6月と12月）

- ・ 各学校の校内研究に生かす
- ・ 自分の授業や指導に生かす

(2) 複式指導の研究実践

全国で少子化が進む中、岩手県の小学校でも約30%の学校が複式学級を有している。岩手県においては、毎年、複式指導の充実が大きな課題となっている。本校ではこれまでずっと意図的に複式学級を設置し、複式指導についての研究・実践を続けてきた。岩手県内の学校からのニーズも高く、附属小学校の複式指導をぜひ参考にしたいという声がたくさん聞こえている。

ア 学校公開研究会での研究及び授業提案

イ 岩手県小規模・複式連盟主催のワークショップでの講義

ウ 県教委主催の複式指導改善講座等での授業提供と講義

エ 岩手大学との連携（複式指導の講義）

オ 岩手県教育委員会との連携（複式指導ハンドブックの作成）

(3) 学部共同研究事業

本校では、岩手大学教育学部と連携した研究事業（以下、学部GP：グッドプラクティス）を通して、地域教員に対して「学習指導について学ぶ場」を積極的に提供している。平成27年度は、「体育」「音楽」「英語」「理科」「算数」で学部GPを行い、県内のたくさんの先生方が研修に参加した。

- ア 土曜日の授業研究会の開催（体育・音楽・英語）
- イ 附属教員による出前授業と講義（体育）
- ウ 本校での研究会の実施（算数・理科）
- エ 本校での実技研修会の実施（音楽）

（４）英語学習の推進

本校では、１～６年生で「英語学習」を行っている。本校の英語学習は、５・６年生で外国語活動が導入される以前から総合的学習の時間の中で行われており、２０数年の研究の歴史がある。今年度は、モジュールを用いた英語学習を設定し、１～６年生が英語と楽しく触れあい、英語のコミュニケーションの基礎を習得することを目的としている。内容は、様々な歌やゲーム、アクティビティが中心で、特に高学年では「書く活動」も位置付けている。

- ア 英語の学習時間数（高３５時間、中・低２０時間）
- イ ALTとの学習（高２０時間、中・低１０時間）
- ウ モジュールによる学習（木曜日に１モジュールを設定）
- エ タスクによる学習（校内研究）
- オ 英語絵本を活用した学習（学部との連携）

（５）子どもの学びの発信

本校では、総合的な学習の時間の取り組みを県や市、地域と連携しながら行っている。そして、その学びの成果が、商品やパンフレットになって広く県内に発信されることで、自分たちが考えたことが社会に役立つことを体験し、自分たちの学びが社会とつながっていることを実感する機会にもなっている。

- ア ６年生「オリジナル和菓子を作ろう」
 - 附小オリジナル「わかたけ最中」を制作（和菓子屋「竹芳」で販売）
- イ ４年生「盛岡の魅力を伝えよう」
 - 附小４年生版「盛岡クイズ」を作成（街歩き盛岡「修学旅行パスポート」に掲載）
- ウ ４年にじ組「復興について考えよう」
 - 「復興手ぬぐい」をデザイン（染め物工房「創」で販売）

（６）わかたけコンサート

本校では、１年に１度（１１月末）に、合唱クラブと吹奏楽クラブによるコンサートを開き、一般の皆さんに活動の成果を発表している。本校の合唱クラブと吹奏楽クラブは、毎年東北や全国のコンクールで優秀な成績を収めており、県内外でその実力が認められている。そのすばらしい演奏を、保護者をはじめ、広く市民の皆さんに披露することで、附属小学校に対する理解を深めていただく機会となっている。

- ア 合唱クラブ
 - NHK全国学校音楽コンクール全国大会 第３位 ＊５年連続出場
- イ 吹奏楽クラブ
 - 全日本吹奏楽コンクール東北大会 金賞 ＊５年連続出場

地域において、現在、貴校はどのような存在であると考えますか：

1 教員のあこがれや目標となる学校である。

本校は、岩手大学の実習校として長年教育実習を行ってきた。本校で実習を行った教員が多数県内の学校に勤務している。その多くが、附属小学校の教育を目標とし、附属小のような授業をしたいと思っている。また、附属小の子どもの姿に学び、自分の学級の子どもをより高いレベルに引き上げたいと日々努力している。このように、附属小学校の教育、授業、教員、子どもは、地域の学校や教員の目標となっている。

2 県内の教育をリードする学校である。

本校の研究は、岩手県はもとより日本全体の将来を見据えた内容になっている。目の前の子どもの現在の課題に対応することも大切にするが、一方で将来に必要な資質や能力及び子どもの学びを考えて、それを具現化することを第一の目標としている。したがって、県内の教育関係者にとっては、常に「附属に行けば新しい教育の姿が分かる」という存在となっている。

3 将来の県内のリーダーとなる人材を育成する学校である。

本校の学校教育目標は、「未来を切り拓く人間の育成」である。その中で、「感性」「知性」「創造性」を養い、課題解決に必要な思考力を身に付け、他者と協働しながら主体的に新たな価値を見つけ出す学びを日々行っている。このような教育を受けた子どもたちは、社会の中の問題を自分の課題として捉え、粘り強く課題解決に取り組み、よりよく解決する資質や能力を身に付け、社会をリードする人材となっている。

4 様々な教育課題に取り組む学校である。

本校の教育活動には不易な部分もあるが、常に評価・工夫・改善を行い、より研究的に、より現代の課題と対応するように変化している。現在は、英語教育をはじめとして、情報教育（ICT教育）、地域教育、道徳教育などに積極的に取り組んでいる。これらの取り組みの多くは、先進的な取り組みとして県内の学校のモデルとなっている。

附属学校の存在意義、貴校の存在意義について：

本校の存在は、岩手県の教育のリーダー的存在であり、シンボリックな存在である。県内の学校や教育に対しては、これからの社会や現代の課題に対応した「新しい教育の在り方」を常に提案する立場にあり、附属小学校の研究及び教育活動が、県内の教育の進むべき方向性を示し、岩手県全体の教育のレベルを高めることに大いに貢献していると自負している。本校の教員は、自主的な学校公開研究会はもとより、前述の学部GP、県教委と連携した各種事業、そして各教科等の研究団体で積極的に授業提案や講義を行い、県内の教員に本校の実践を広く還元している。また、学校公開には、毎年1200名を超える参会者があることから、本校は県内の教育関係者にとっての「学びの場」として定着しているといえる。つまり、岩手県における本校の存在は、本校だけの意義や目的ではなく、岩手県の教育会全体にとっての必要性を含んだものなのである。